慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	飯田裕康・ 高草木光一編『ここで跳べ 対論「現代思想」』
Sub Title	
Author	大島, 通義(Oshima, Michiyoshi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2004
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.97, No.1 (2004. 4) ,p.163- 167
JaLC DOI	10.14991/001.20040401-0163
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20040401-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」97 巻 1 号（2004 年 4 月）

書　評

飯田裕康・高草木光一　編

『ここで跳べ　対論「現代思想」』

慶應義塾大学出版会，2003 年 4 月，348 頁

この書物は，2001 年秋学期におこなわれた慶應義塾大学経済学部の特別講座「現代思想」の記録である。オムニバス方式の特別講座は，大学ではこのところすっかり定着した感があるが，そのなかでこの講座は次の点で異色を放っている。ひとつには，この講座が小田実という，大学という制度の枠からははみ出し，また，既存の学問の分野別にこだわらない知的活動を続け，市民運動を実践してきた人物の「現代思想」についての考え方を軸に組み立てられていたこと，そして，その小田実と作家・音楽家・臨床医・都市工学者・政党政治家との対話の形式でこの講義が進められたことである。実際には，ある週のこれらの講師たちによる講義を受けて，その次の週には聴講者との質疑を交えて小田が話すというのが，この講座の基本的なパターンとされた。

本書は二部からなっている。第 1 部「対論」は 2001 年 9 月末から翌年 1 月までの講義録であり，第 2 部「饗宴」はこの講座の主催者 3 人（小田，飯田裕康，高草木光一）による座談会と受講した学生たちによるそれとからなっている。まず，この講座の全体の流れを見ておこう。

初回の講義では，小田が「現代思想をどう捉えるか」というテーマで，その直前（2001 年 9 月 11 日）に起きた「同時多発テロ」を糸口としながら，現代思想を考えるうえでヨーロッパ中心主義を再検討すべきことを訴えた。その根拠として小田は，西欧文明の起源とされるギリシャ文明は，白人の文明ではなく，そのルーツは「アフロアジア」にあることを指摘する。これは，それ以降の講義で繰り返される小田の，「東洋」と「西洋」の二つの視角からする思想や文化の把握という主張を予示するものだった。

これを受けて，第一のテーマ「近代化とアジア」について，まず作家ファン・ソギョンが韓国における近代化の道を，欧米諸国がたどってきた道や拠り所としてきた思想に求めるのではなく，「東学思想」にもとづく「自生的近代化」，つまり朝鮮半島に古代から伝わっている民間信仰の「檀君神話」と仏教の「弥勒思想」を柱とすることを主張した。小田の要約によれば，それは「アジアからの『グローバリゼーション』」の思想的戦略でもある。これに続く小田の講義は，「グローバリゼーション」の根本にある西欧民主主義の価値と問題点を明らかにしようとするものだった。よく知られているギリシャの「ポリス＝市民国家」――小田によれば「都市国家」とするのは誤訳――の仕組みやあり方が検討されたうえで，小田がその問題点として指摘するのは，そこでは「市民国家」に属する「人間」とその外部にいる「野蛮人」との区別が明確だったこと，と同時に，この「市民国家」が奴隷制と周辺国の隷属によって支えられていたこと，すなわち「閉ざされたデモクラティア」だったことである。ここから帰結する「グローバリゼーションへの市民的戦略」が「開かれたデモクラティア」への志向である。これは，その後の講義でも基調として維持され続けることになる。

第二のテーマは「民族と文化」である。言葉で短い時間に語りつくすことのむずかしいこの主題の講師は沖縄の作曲家・歌手の喜納昌吉だった。演奏をふくめて喜納が講壇に立った 90 分は，この講座の一連の講義のなかでもっともおおきく深い感動を聴衆に呼び起こしたようである。喜納が打ち出したのは「民族性を相対化する視点」であり，この視点に立って「地球単位，人類単位でものを考える『開かれたこころ』を持つこと」である。過去数世紀のあいだ，自然とも，また人工のたとえば電波とも関係のない国境が引かれ，それ

がまた少数の国の政府の意向で勝手に引き直されてきた。その結果が人口爆発であり戦争とその惨禍ではなかったか。人間は，このようにして「開かれた心」を失った。この「心」を取り戻し，音によって世界の人々を唱和させること（小田の言う「祭り」），これが喜納の訴えようとしたことだった。これに対応して小田は，別の視点，すなわち経済のグローバリゼーションから軍事的なそれへの展開——小田は「2001 年 9 月 11 日」をその転機と見る——を踏まえたレアリズムの観点に立った戦略を提唱する。具体的には，第二次大戦後のドイツ連邦共和国基本法に定められた良心的兵役拒否を高く評価したうえで，日本については「良心的軍事拒否国家」たることを目指そうというものである。ここには，小田独自の平和主義が端的に表明されているのを見ることができる。

第三のテーマ「生命と倫理」の講師として招かれたのは脳神経外科医の山口研一郎である。山口は臨床医としてはたらくかたわら，日本陸軍の 731 部隊が旧満州でおこなった人体実験の告発に参加し，また脳死や臓器移植について共に考える活動にも従事している。山口はまず「医療や医学は社会から独立した技術や科学ではなく，社会のなかにある」こと，そして「いまや医学は人々の誕生から終焉にいたるまですべてを支配するようになった」ことを指摘する。事実，不妊治療，体外受精，遺伝子診断，臓器移植，クローン，脳死判定といった一連の事柄は，個々人がみずからの「生と死」にどのように対処するのかという問題にとどまらず，「人と人との関係とは？」「人間の未来は？」そして「人にとって『死』とは何なのか？」などの問を私たちに突きつけ，私たちがその答えを容易に見出せないままに，医学の研究と技術はこの方向へといっそう進みつつある。アメリカではすでに実現し，日本でもやがては実現するだろう「臓器交換社会」を肯定する立花隆を批判して，山口は次のように言う。立花が触れていないのは「医学が人体を『カネのなる木』にしてしまったこと」である。いまや「資本」と「医学」が完全に結びついており，「貧困層やいわゆる『第三世界』の人たちが（立花の肯定する）『生命連鎖』の底辺に置かれるのは間違いない」と。そして最後に，人体リサイクルが日常化すれば，「『人間と人間との関係』が『モノとモノとの関係』に還元され，人間社会そのものが崩壊してしまうかもしれない」と問いかけて，山口はその講義を終えた。

次の週には飯田と高草木が，その翌週には小田が山口の講義にコメントを加えた。その際に紹介された聴講者によるアンケートの内容から見ても，また教室での質疑から見ても，聴講者は山口の講義に強い関心を示したことが察せられるが，その内容は多岐にわたることもあり，割愛せざるを得ない。ここでは，小田によるコメントのみを見ておこう。小田は，先端医療が進みつつあるなかでの「生命倫理」に問題を絞って，みずからの考えを次のように述べている。小田が倫理の基本とするのは「人間は殺されてはならない」という規準であり，「人間を殺してはならない」という規準ではない。小田は前者を「される側 done-side」，後者を「する側 do-side」の立場に立った倫理観だとし，さらに，後者はデカルト以来の近代合理主義の流れを汲んでいるとする。これに対置される前者と親しい関係にあるのが「生老病死」という言葉に表される東洋的な考え方である。ここから導き出されるのは，言うならば「老人には老人の価値があること」を認める社会への志向に他ならない。「『殺されてはならない』を基礎にして『より良い明日』を」——これが小田の，めまぐるしい進展を遂げつつある先端医療の動向に目を奪われることなく当面とろうとする戦略である。「では，具体的に何を？」というある学生の質問に，小田は「生命科学にかんする研究開発には特許を認めない」ことを提案し実現させたいと答えて，この第三のテーマの議論は終わった。

第四のテーマは「都市と市民」である。この問題を考える素材となる経験として取り上げられたのは 1995 年の阪神・淡路大震災であり，その復興の過程を市民の目で見，考え，発言した神戸在住

の都市工学者早川和男が講壇に立った。被災者の一人として復興に関与した早川は，そこでの経験を次のように描きだしている。大震災は，日頃から居住差別を受けている高齢者や障害者，低所得者，失業者，在日朝鮮人などに特におおきく深刻な被害をもたらした。すべての政党が与党となっていた「超翼賛体制」（共産党は大震災後にようやく野党になった）のもとでの神戸市政は，復興計画の立案に被災者の参画を認めず，被災者の声を聞こうともせずに復興を進めてきた。労働組合もまた，その政党との関係にしばられて神戸市政の批判を差し控えている。長年「居住は人権である」と唱え続けてきた早川は，いまの日本が必要としているのは市民が「主権を取り戻す」ことだと述べてその講義の結論とした。小田もまた，被災者の一人として早川とともに復興に関与した。小田によれば，日本人の自然観では天災は「天譴＝天によって下された一撃」と受け止められてきた。そのもとで，昨今の哲学者（たとえば林達夫）や作家（司馬遼太郎）は，「だから仕方がない」と考える。これは Philosophy in action ではない。哲学は現実感覚を失って高邁な理性の話しに終始している。このような思想のあり方をよいことにして政府は，「国費による被災者救援は私有財産にたいする補償となる」という理由で公的な援助を拒否した。しかし，被災を「人災」としないようにする政府の責任はあるはずだ。この考えを実現するために，小田は早川等とともに，被災者の「生活再建援助法案」の市民＝議員立法の運動を起こした。小田は言う，「こうすることが Philosophy in action なのであり，これが被災現場で私が考えた『現代思想』だ。」

第四のテーマ「政治と市民」の講師として招かれたのは日本共産党委員長の志位和夫である。志位と小田のあいだには，小田たちが企てた上記の市民＝議員立法に志位がただちに協力を申し入れたという経緯があった。「議会制民主主義の諸問題」と題する志位の講義は，まずその歴史をアメリカの「独立宣言」から説き起こし，日本の議会制度とその運用に見られる問題点を指摘し，間接民主主義と直接民主主義の関係，政党と市民運動の関係を過不足なく論じて，私には，スタイルは古いがよくできた政治学の教科書を読むような印象をあたえるものだった。半世紀前の共産党を多少は知る者としては，名前は同じでもこれはもはや別の政党だと，あらためて思わせられた。と同時に，このような変化を遂げた共産党が，やがて新たな難問に行き当たるだろうことを，小田はドイツの緑の党を例にして指摘している。既成政党への批判を旗印として結成された緑の党は，連邦議会に議席を得，さらに与党となる過程で，その初心とはことなる党運営と政策選択を余儀なくされている。与党となったこの党は，小田は触れていないが，たとえば社会保険制度改革で野党時代とは明確にことなる政策を支持するにいたる。議会制民主主義は国の統治の根幹にかかわるものであるだけに，その制度を変えるのは容易なことではない。小田にとってさきの市民＝議員立法は，この状況に風穴を開ける最初の企てだった。「まず政党ありき」ではなく「まず市民ありき」の立法システム，これを国の政治の基本とすべきだ，これが小田の提言である。そして，本書のタイトルともされている「ここで跳べ」というあのギリシャの有名な言葉を引いて，小田はこの講義を終わった。

この講座の最終回では，ふたたび山口を招いて生命倫理の問題が論じられた。そのなかで，前述の小田の「生命科学にかんする研究開発には特許を認めない」という提案と積極的に取り組むことが，講師たちによって確認された。その実現には数多くの難問を解かねばならないことは認めながら，これをあえて将来に向けての課題として設定したのは，「大学から市民社会へ」というこの最終回の講義のテーマを謳い文句に終わらすまいという小田たち主催者の願いのあらわれと見ることができる。

どれ一つとっても容易には論じ尽くしがたいテーマを四つかかげて，論議にともかく一つの流

れを創り出したのが小田の貢献に負っていることは明らかである。西欧の近代合理主義を東洋の思想の伝統を強調することで相対化し，平和主義と民主主義を堅持し，「する側」の論理と倫理に「される側」のそれを対置するという，この講座での小田の論調には，異論もあり得るだろう。ファンや喜納が投げかけた問題が十分に理解され，受けとめられたのかといった疑問が残らないではない。しかし，それをあげつらうことは，ここでは必要ではない。

この講義録を通読して印象づけられたのはむしろ，回が進むにしたがって，講師と聴講者とのあいだの教壇の「上」と「下」，「教える者」と「教えられる者」という区別が薄れ，消えていったように見えることである。敢えて言えば，それは，言葉をつうじて人と人が向き合う，ある意味で「公的」な空間の現出と言ってもよい。それには講師たち，とくに小田の人柄や語り口が寄与したことは確かだが，同時に，聴講者のアンケートを整理し，詳細なシラバスを作成・配布した高草木や彼を助けた学生たちの努力なしには，このような対話は実現しなかっただろうと思われる。また，小田や主催者の問題意識の所在を明確にするために，講座の開幕にあわせて『小田実の世直し大学』（飯田・高草木編，筑摩書房，2001 年 9 月）を公刊したこともまた，聴講者の理解を助けたはずである。

だが，同時に見落とすことができないのは，この講座が学部のカリキュラムの一環をなすという事実はどのように受けとめられたのかという問題である。まず，この講義を履修した約 500 名の学生のうち常時出席していたのはほぼ三分の一だったと言われる。これは，昨今の大学で日常茶飯のことではある。他方，教室には，毎回出席し積極的に討論に参加する学外の聴講者たちがいた。言うならば，この講座での上記の意味の「対話」が学部の制度を半ばはみ出したところで成り立っていたことは否定しがたい。主催者たちは，おそらくあらかじめそうなることを見通したうえでこの講座を実行に移したのだろう。

第二は，この講座で提起された問題や疑問に「経済学」あるいは「経済学者」はどう答えたのかという問題である。大学が開催するいわゆる「公開講座」や「市民講座」ならばいざ知らず，学部カリキュラムの一環としてこの講座を設定したかぎりは，この問を避けて通ることはできない。この点について文字通り孤軍奮闘したのは飯田だった。臓器移植や脳死問題についての山口の所論に対して飯田が率直に表明したのは「無力感」だった。新古典派経済学の思考の枠組みに蹋蹐し自足するのでないかぎり，誰しもこれには同感せざるを得ないはずである。人間を「商品」として扱ったマルクスの経済学にも，人間の「死」に対する明確な意識や自覚はない。この状況から脱却するために飯田が考えようとしているのは，「個人と個人の関係性をどうつくりあげていくのか」という問題である。「自然と人間の共生」がしばしば望ましい方向として語られるけれども，環境問題を結局ビジネスとして解決してゆくのであれば，それは「人間と人間との関係」を「モノとモノとの関係」に還元する「資本の論理」を超えることはできないのではないか。このような市場経済の営みをささえているのは「貨幣」である。質疑でその将来の見通しや意義を問われた「地域通貨（もしくはエコマネー）」は，たしかに人間同士の「顔の見える関係」を取り戻そうとする試みだが，高草木が指摘するように，これが「貨幣にとって代わるという戦略を立てれば失敗に帰するのは歴史的にも理論的にも明らか」である。この講座で語られたかぎりでは，「現代思想」と経済学との関係づけはここで終わった。

この書物の第 2 部に収録された学生による座談会で，ある学生は，「『現代思想』の意義は，生命倫理の問題も戦争の問題も，あらゆる問題が自分自身につながっていることに気付かせてくれたことだ」と述べている。この感想が，聴講者個人についてのみならず経済学部についても成り立ったとすれば，当面，この一連の講義をつうじて提起された問題についての経済学の対応がいかに未熟な

ものだったとしても，この組織を通ずる知的な営みに私たちはなお希望を託すことができるだろう。しかし，現に進行しつつある大学改革は，高度化する情報社会への適応のみを急いで，このように希望する私たちを力づけるものとは見えない。この現状に警鐘を鳴らすことを意図して，講座「現代思想」はあえて大学の制度を半ばはみ出す方式をとったのかもしれない。いささか穿ちすぎの見方だが，「ここがロドスだ，跳べ」は，小田の学生たちへの呼びかけであるのに先だって，まずは主催者たちが聞いた内なる声だったと私には思われる。その企図は，果たして，また，どのように今後に受け継がれてゆくのだろうか。

大　島　通　義
（名誉教授）